

2017年度北海道大谷学園連合会

高等学校相互評価報告書

対象校 北海道室蘭大谷高等学校



HOKKAIDOOTANI
MURORAN HIGH SCHOOL

評価校：稚内大谷室蘭高等学校

(実施日：2017年12月11日)

2018年3月31日

北海道大谷学園連合会相互評価委員会

北海道大谷学園連合会相互評価委員会

主査	堀	武	(大谷学園委員会委員、元北海道学事課長)
委員	藤野	明信	(函館大谷学園専務理事)
委員	金石	潤導	(真宗大谷派北海道教区教化本部長)
委員	丸山	政秀	(函館大谷高等学校校長)
委員	富原	加奈子	(札幌大谷高等学校教頭)
委員	小野	茂	(帯広大谷高等学校教頭)
委員	南條	式史	(北海道大谷室蘭高等学校教頭)
委員	高野	敏彦	(札幌大谷高等学校事務長)

北海道大谷室蘭高等学校の概要

設置者	学校法人 望洋大谷学園
理事長名	西崎習一
校長名	竹本将人
開設年月日	(法人設立) 平成16年5月12日 (学校設置) 昭和33年2月20日
所在地	室蘭市八丁平3丁目1番1号
設置学科	普通科
入学定員	225名
教職員数	40名

評価領域Ⅰ 建学の精神・教育理念、教育目標・学校目標

北海道大谷室蘭高等学校は、旧室蘭大谷・登別大谷高校の統合校として、建学の精神を含め、校章・校歌そして制服等々の見直しと新たなる教育理念を再構築して、今の建学の精神・教育理念に基づく教育活動があることに改めて敬意を表するものである。

そのことを踏まえて、この度の自己点検評価をさせていただく。

[建学の精神・教育理念について]

北海道大谷室蘭高等学校の「建学の精神」「教育理念」は「宗祖親鸞聖人が開頭された本願念仏の教えをよりどころとし、常に真実を求めんとする宗教教育の実践を理念とする」とあり、あらゆる教育活動が宗教教育を軸として展開していくことを目指しているということが明確に示されている。

学校行事・儀式・日常の教育活動が、「建学の精神」「教育理念」に基づくものと位置付けられ、幅広く展開されている。そのことは、生徒の情操教育に反映されるものであり人間教育の根幹をなすものである。特に新生を対象とした宗教宿泊研修は、その目的を「本校樹立の精神を知る」ということを掲げ、真宗大谷派北海道教区より講師およびスタッフなどの協力を得て、学外からの支援体制のもと閉鎖性を払拭しつつ、より一層の「建学の精神」の具現化に努めている点は非常に評価できる。

更に定期的に行われる教職員対象の宗教教育研修は、帰属意識の形成につながり、「大谷」の教育理念を具現化する上で成果を高めている。

[教育目標・学校目標について]

建学の精神は、設置者の教育理念・理想を源にする学校経営の自主性を示すものであり学校目標・教育目標に深く関係すると共にその実践を通して、学校内外への周知と当校の存立を明確にしていく最も重要な事柄であり、そのことは学習成果を達成するための基礎となるものと思われる。

その意味において、先ず教職員に対し「学園教職員宗教教育研修」を実施し当校の創立理念、それに伴う教育の目的・目標を共有することに努め、学校行事・宗教行事や全校朝会では、教職員と生徒双方に対し建学の精神の理解と共感を促すよう取り組んでいることが伺える。

また生徒には、より親しみやすいよう「教育スローガン・法語ポスターの言葉」として教室内外に提示し、更には学外に対しても学校運営方針（学校要覧）として

「宗教教育の実践、いのちの教育の推進」が明記され保護者にも公表を行い、ホームページでは建学の精神を始め宗教行事の内容が閲覧でき、加えて建学の精神を具象化、文字化したものとして校章・校歌を掲載し、具体的な手法をもって伝えている点は高く評価できる。

[定期的な点検等について]

学校機構の中で決定機関は職員会議であり、教育課程の編成や日常の教育活動に関する諸事項については、職員会議を経て校長の決裁となっている。

建学の精神の解釈の定期的な見直しや各目標の点検の必要性についての判断は理事会が担い、その判断に基づき具体的な精査は職員会議で協議、決定されていくことが望ましい。

しかし合併・統合校への移行と大きな転換期を向かえ、二校それぞれに協議を行うことや、合同での会議を持つことが時間的な制約から十分な協議の場を持つことが困難だったため、やむなく校長主導で決定され、職員会議へは通達・報告となってしまうことが反省事項として挙げられる。

そのことを踏まえ、大谷教育の更なる充実が図られていくことを期待する。

評価領域Ⅱ 分掌

この領域の評価の総評

分掌全体の評価結果は、「建学の精神」を基調として情操豊かな人間教育が実践されるよう、各分掌が効率的に配置され機能していると評価する。また、教育活動では、資格取得への取り組みが積極的に推進される等、地域社会からの要請に応えられる人材育成のための校務体制が確立されている。情報公開についても、適宜多くの広報手段により広範囲に公開されるものと評価する。

室蘭・登別大谷両校の統合が実現し「北海道大谷室蘭高等学校」として新たなスタートを切った。両校には、創立以来培われた多くの貴重な教育実践・実績の蓄積がある。それらを教育活動全般に反映させるためには、想像以上にリアルな課題や困難な面があると思われるが、教職員の共通認識のもと、新たな教育環境で協同作業が幅広く展開されることにより、さらなる高い学校評価に結びつくものとする。

項目別評価結果

[教育課程・学習指導（教務）]

2013 年度より作成されていたシラバスを精査した結果、不足部分があり、2016

年度作成しなかった。次年度は作成法や配布を工夫し、取り組みを再開して欲しい。検討課題も明確となっており、今後さらなる内容の充実が期待できる。また、作成すること自体の意義は勿論であるが、各教科でシラバスを作成する経過で行われた議論や全教職員に配布し、各教科の内容が共有される事による（内容がオープンにされることによる緊張感も含めて）職場の活性化等に果たす役割も大きいと思われる。

定期考査において成果を発揮できなかった生徒に対して、組織的な取り組みが行われている。現実的な場面では様々な課題も出てきていると思われるが、学習への意欲向上へ学校あげての姿勢が表れており、大いに評価できる。

キャリア教育の一環として多様な資格取得機会が設けられており、生徒の進路達成のみならず、外部の有為な人材を学校に招き、あるいは生徒に出向かせて資格取得の機会を多様に設けており「生き方」の考察につながる機会を提供する指導体制をとっていることは「総合的な学習の時間」の趣旨とも合致した指導展開であり評価できる。

生徒による授業評価は行っていないが、その観点は生徒実態に基づいたものであり理解できる。今後の課題となると思われる。保護者アンケート等も行われており、授業改善への真摯な姿勢がうかがえた。

退学者が多かった時代に行われた「教師の考え方の変革」のベースとなる考え方の内容が建学の精神とも関わる素晴らしいものであったと思われる。時間の経過とともに教員の入れ替わり等もある中、その考え方をどう学校全体のものとして維持していくのか注目される。

〔生徒指導・部活動（生徒指導・生徒会）〕

「規範意識の育成と基本的生活習慣の確立」をスローガンに掲げ、きめ細やかな生徒指導が計画的に実施されており、教職員の日々の努力がうかがわれる。また、保護者への働きかけは、懇談会、家庭訪問、個人面談、学級通信等により積極的に行われている。

問題行動の未然防止については、「消極的な生徒指導」と「積極的な生徒指導」の2つの観点が確実に定まっており評価できる。とりわけ「積極的な生徒指導」については、「あらゆる教育活動の場面」で「生きる力」という目に見えないものにはたらきかける指導であり、本来的な生徒指導につながる視点であると考えられる。今後、さらに研鑽されていくべきテーマであると思われる。

全校生徒の9割を超える部活加入率を誇る当校にとって部活動は集団生活の中

で協調性や社会性を身につけることはもとより、学校の活性化にもつながる根幹をなすものとして、今後も部活動の活躍に大いに期待するものである。

〔進路指導〕

教務部の年間指導計画と連携した緻密な年間指導計画に基づき、進学希望者、就職希望者と保護者への働きかけが行われている。また、「総合的な学習の時間」の活用や学習指導など、学年特性を十分に踏まえた計画的な取り組みが行われている。特に情報提供が生徒のみならず保護者の理解・意識向上ともなっていると考えられ、長年の積み重ねをふまえた取り組みは大いに評価できる。

3年の各クラスから就職内定者、進学内定者・希望者が1、2年の同じ系のクラスに出向いて進路への取り組みと後輩に伝える「先輩の話を聞く会」も興味深い。後輩が進路における様々なリアルを学習し自分たちの準備の糧にできるだけでなく、3年生もまた、自ら語るという取り組みをする中で自らの自立の準備にもなっていくとも思われ評価できる。また、実際にリアルタイムで働いている「企業人の話を聞く会」も生徒たちにリアルな社会の厳しさや心得を知る上で貴重な体験になるのではないかと思われた。

〔保健管理・安全管理・個人情報管理〕

生徒の健康・安全の向上に資する明確な危機管理マニュアルが適切に示されており、また通常の美化・清掃活動の他に学校薬剤師による環境衛生検査と助言が行われていることは大いに評価できる。

個人情報管理についても規程・細則が明確に示されており、個人情報・個人データの管理が適切かつ安全に管理されている。

学校の入試分野・教務分野・進路指導分野の情報発信であれ、データの内部的活用であれ、適切な管理運用が求められることは言うまでもないことだが、校内において管理運用及び個人情報管理のシステムが確立していると考えられる。

〔入試・生徒募集〕

一般的に多くの学校で実施されている中学校への①学校訪問（5～12月）②教員説明会（8月）③学校別説明会（6～11月）の他に、部活動生徒の募集が多いという学校の特色に合わせ「部活動オープンスクール」や、授業体験を希望する生徒対象の「室蘭大谷オープンスクール」が行われている。また、保護者のみを対象とした「保護者オープンスクール」も設定され、個別相談にも応じている。

上記のように、入試選抜の方針・選抜方法の説明・明示については、その対象を細かく整理し、それぞれのニーズに応える内容で多様かつ丁寧なものとなっている。

広報及び生徒募集活動の体制は、広報活動の企画・立案の提案母体である「入試室」が分掌に位置づけられ、広報活動の中心的役割を担っており、各地区の進路担当者と連携して中学校訪問をとおして募集要項、各種連絡事項の伝達や受験生動向の把握を行っている。

また、各部活生徒の募集も入学生の大きなウェイトを占めているため、校長、教頭、「入試室」の担当教員を含めた特奨生委員会が構成され、各部活動の募集状況の集約・調整を行っており、学習特待生については進路担当者、または「入試室」の担当者が条件を確認して採用の決定をしている。

各広報及び生徒募集活動については、それぞれの体制が充実しており、各々担当者が機能的に結びつき緻密な活動が行われていることは評価できる。

〔特別支援教育〕

特別支援教育を必要とする生徒の受け入れについて、入学（受験）前に確認や周知をすべき内容が整理されており明確となっている。

入学後も、事前相談の内容を学年毎に伝え、教科担任、学級担任の連携のもとで情報交換が頻繁に行われている。また、年間4回開催される「学業委員会」では学年主任から各学年の生徒の状況報告があり、指導内容について話し合われている。特別支援を必要とする生徒であることを充分理解して入学許可させているという責任感や生徒の成長への願いが強く感じられた。試行錯誤をして、とりわけ学習面でも苦労・工夫の必要な場面も多々あろうかと思われるが、学校全体で真摯に取り組んでいる姿勢が伝わった。

今後の課題についても、保護者との情報交換・中学校との連携の強化を図っていくという方針が明確になっている。また関係機関とは子どもの成長を現実的に保証できるものとしての連携を模索しているのではないかとということが伺えた。

〔地域活動〕

「地域に根ざし、支持される学校」となるため、地域密着の活動やボランティアを重要と捉え、様々な工夫を凝らしながら活動しているのが伺える。

学校、部活動、行事等の様子は、学校やPTAからの様々な配布物、広報物がある他に各行事に家庭からの参加を募り、PTAの会合で学校の教育方針や学校評価についての説明を行う等、校内の様子を伝えるだけでなく、協力体制を作るべく取

り組まれている。仮校舎での活動で不便のある中でもPTA総会や保護者進路説明会では講習参観、授業見学等ができるようにする等工夫をしながら取り組まれてきた。課題であったPTA活動を保護者に伝える方法として「自宅へ郵送する」というやり方に変えるという工夫がなされ、各取り組みへの参加申し込み等「保護者との意思疎通」という一番大切な部分が改善された。シンプルな方法とはいえPTA活動のネックとなる部分でもあり、効果は大きいと思われ評価できる。

また、地域の行事への参加によって交流をはかっていくことが、地域などに対して、学校の様子を伝える最も効果的な手法として捉えられている。さらにボランティア活動については、日常的にボランティア活動を行うインターアクト部を中心に、実に多種多様にわたる活動が行われている。

全校的に社会活動に取り組まれており、地域に対して十分に連携・協力している。それが生徒にとっても非常に貴重な体験となっている面からも評価できる。学校の考え方として、地域貢献やボランティア活動を積極的に推奨し、開かれた学校づくりをすすめている。

〔図書館〕

新校舎となり、図書室は十分なスペースをもったものとなった。現状では、あと数年かけて整備する部分があるということであるが、ハード面での条件も徐々に整ってきている。

また、学校図書館司書教諭の資格をもつ教員が2名いる状況でもあり、今後、いよいよ生徒が本に親しみ、読書が習慣化し、また学習や資料集め日常的にできる等有効な活用ができていくと思われる。

評価領域Ⅲ 管理運営

この領域の評価の総評

理事会、同窓会及び学校関係者が一体となって教育の充実を目指している。

平成27年4月に新校舎が完成し、新しい環境のもとに新しい学校づくりが進められている。新しい学びの場で「大谷で成人式を」を合い言葉に、卒業生の成人たちのお祝いが継続されていることは、素晴らしいものであり、在校生さらには卒業生の一体化を醸成する上で画期的なことであると思われる。

学園の合併により統合校としての歩みの再確認と合わせ、債務返済に向けての現状認識と施設・設備の点検が今後の課題と考えられる。

評価領域Ⅳ 財務

この領域の評価の総評

標記項目について、平成28年度「財務に関する種類」等から評価すると厳しい財務状況とは思われますが、全教職員が共通認識を持ち一丸となって、財政の健全化を進めることに取り組む姿勢は評価できる。

ただ、私学運営を取り巻く環境は、今後も厳しくなることが予想されるので、他校との違いをより一層明確にし、選ばれる学校づくり実現し生徒確保に努めるとともに、人件費の抑制が財政の健全化の方策の一つであると考えられる。

評価領域Ⅴ 改革・改善

この領域の評価の総評

自己点検評価を実施するために、平成20年に「学校評価に関する規定」を策定し、「学校評価委員会」を発足させ、全教職員で取り組んでいる。この自己点検評価の結果は保護者にも通知され、それに基づき保護者が学校関係評価を行って、学校の改革・改善に役立てていることは十分に評価できる。

理事長、校長から「今後、より一層学園の一体化を進めていくことはもとより、少子化は全ての学校が抱える課題である。しかし、私学はその特徴である建学の精神を教育の中でさらに深化させ、特色ある学校として存在していかなければならない。特に本校は大谷の願いを社会に広く伝えていくことが求められている」と表明されたところであり、これらが成就していくことを期待するところである。